

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 高野 修一 会員数 約16,200人)

T E L 042-582-2511

1 前文

『歴史総合、日本史探究』としては2年目の出題であったが、多様な資料を用いた問題が多く見られた。探究学習の場面を想定した生徒のメモやワークシート形式のほか、時代横断的な総括的設問や探究の方法を問う設問が各大問で見られ、新課程科目の趣旨を反映した構成であった。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

設問数は大問6題、小問33題の構成で昨年度の追・再試験同様であった。出題範囲は原始から戦後まで偏りなく、歴史総合、日本史探究の学習範囲内で適切な設定であった。各設問では歴史用語の知識のみを問うのではなく、その内容理解に基づいて文章を判断させる問題が目立った。単純な語句暗記ではなく、正確な内容理解や概念把握を求める工夫が見られ、探究的な歴史学習の方向性を示すものであった。

出題形式別では、正文選択が6題、誤文選択が4題、正誤組合せが3題、年代配列が2題、語句の組合せが4題、正文組合せが4題、図版・説明(または用語等)の組合せ8題、人物・事項の組合せが1題、用語と説明との組合せが1題で、資料活用問題の比重が多く、資料やリード文の読取りを重視する点で一貫していた。資料についても、絵画、文字史料、地図、グラフなど多様な形式が用いられ、文字史料では現代語訳が多く活用された。また、生徒の探究場面を想定した「ノート」の内容を判断材料とする問題も複数の大問で見られた。

時代別では、時代横断型の出題が全体を通して多く、時代ごとの知識・理解を基に、各時代を比較して多面的・多角的な視野から思考し、判断する力が求められた。また「歴史総合」を除いても戦後史の出題が3問と旧課程に比べて増加しているが、令和7年度実施問題では、幅広く2000年代まで出題が見られたのに対して、令和8年度追・再試験では歴史総合部分で1990年代、日本史探究部分で1970年代と、年代としての範囲はやや狭まった。

分野別では、多分野にまたがる大問構成の中で政治・社会経済の両分野からの出題が多く、文化史は大問5の近世を除き各大問で扱われた。以下、詳細を見ていくものとする。

第1問は「歴史総合」の範囲からの出題。「歴史における旅とその役割」という探究学習を題材にした出題で、三つのパートで構成された。確かな知識を求める出題が特徴的である。

Aは「宗教と旅」がテーマで、博物館見学という場面設定がなされた。

問1は、江戸時代の伊勢参りに関連する正誤問題。資料の読み取りのみで正答が導ける内容であった。旅程例に提示される旧国名の情報は、名所が「広範囲」に及んでいたか否かを問うにとどまらない活用も考えられる。

問2は、18・19世紀のメッカ巡礼に関する資料文への語句の組合せ問題。空欄アは18世紀末という情報だけで「ナポレオン戦争」を読み取る必要がある。ナポレオンのエジプト遠征は記載のない教科書もある。空欄イは資料文の内容だけで解答できる。知識活用の手立てがあるとなお良かった。

Bは「指導者の旅」というテーマで、生徒と教員との会話形式。

問3は、イブラヒムの通過した都市を正しい順序に並べる配列問題。「ハルビンの正確な位置」「孫文が東京で中国同盟会を結成したこと」を知っている必要があり、日本史探究の学習者には難しい。歴史事象を地理的な視点で捉えさせる点では良問といえる。

問4は、語句と正文の組合せの正しいものを選ぶ問題。ノート1の読み取りから英・露の取り決めに関する資料を選ばせるが、英露協商に盛り込まれたイラン分割に関する知識が前提となる。空間的な認識よりも知識がより強く問われ、難易度が高い。

問5は王族・皇族の訪問の事例について述べた四つの資料文について、正しく説明したものを選ぶ正文問題。概要をまとめ比較することで相対的な位置づけを行い、歴史の見方・考え方について考えさせる出題であった。

Cは「現代社会における旅」で、授業後にグループで調べを進めるという状況設定。

問6は表の読み取りを伴う正文組合せ問題。表内の数字について、割合を基に概数を計算する必要がある。神武景気の時期や、日本の国民総生産が資本主義陣営で第2位になった時期など、判別の根拠が年代のみである。判別の助けとなるような資料がほしい。

問7はプラザ合意やヨーロッパ連合に関するノートを素材とした正文選択問題。実質的に知識を問う出題になっている。為替相場の変化のグラフや、海外旅行に出る日本人の増減のグラフなどの資料読み取り要素を、思考の過程に含めることも考えられよう。

問8は第1問の内容を総括する正文選択問題。資料や会話文を踏まえ、ここまでの学びを抽象化し表現する出題だが、実際は読解力が求められる。二つのメモをまとめたうえで、新たな歴史的事象や現代の国際情勢と比較する形にするなどの工夫ができよう。

第2問は、古代から近代に至る法と裁定を主題とし、盟神探湯、分国法、公事方御定書などを扱った。特に罪刑法定主義の概念理解を問う設問は、日本史の出題としては特徴的であり、歴史的事象を通して近代法概念の理解を問う斬新なものであった。

問1は絵画の読み取りと古代の裁判形態の一つである盟神探湯に関する図版・説明文を用いた組合せ問題。誤文「い」は縄文時代の土偶の説明であり時期ずれで受験者は容易に判断することができたであろう。

問2は分国法の現代語訳から、水利紛争の解決について問う図版・説明文を用いた組合せ問題。提示された史料の読み取りで対応できる問題であったが「え」のみ喧嘩両成敗の用語が登場し、選択肢全体の構成としてやや唐突感がある。同時代の政治・社会に関する知識的要素を関連させることで、知識理解と組み合わせた出題も可能であっただろう。

問3は江戸時代における公事方御定書や死刑の適用範囲縮小といった事柄に関して、「前提」となる「時代の様相」を問う正文選択問題。設問文の「前提」の捉え方に戸惑った受験者はいたかと思われるが、実質的に江戸時代から明治初期の政治史に関する時期判断の問題であった。

問4は資料2点について、罪刑法定主義の観点から適切な評価の組合せを選択する正誤の組合せ問題。罪刑法定主義の概念の理解を問うもので、日本史としては珍しい形式の出題であった。罪刑法定主義が大切な理解が求められる概念であることに異論はないが、歴史的文脈との関連付けは解答に必要な出題であり、日本史の出題としては工夫の余地がある。出典となる資料の性格、年代、作成者などの周辺情報を示すことで、同時代の背景的知識と関連させるなどにより、日本史学習の成果を測るものと出来たのではないだろうか。

問5は古代～近代まで含む総括的な正誤問題(誤文)。日本史探究の性格が反映された出題であった。

第3問では『養老令』『延喜式』『続日本紀』などの史料を用いて律令国家の制度や経済が扱われた。史料の読解と基本的知識を統合して判断する設問構成となっており、資料活用能力と知識理解

の両面を測る出題であった。

問1は『養老令』の書き下し文をもとにした正文選択問題。資料1・2とも資料全体の読み取りを要求する。正文②のみ2種類の資料の組合せを判断する。③④は資料と知識の組合せで正誤判定。4択としたことで、各選択肢文の構成に偏りが見られた。正文の組合せ問題にすることにより、資料活用の力と知識との組合せの両面の力を測ることの出来る問題となったであろう。

問2は『延喜式』に記された漆の貢納国地図を使用した図版・説明文を用いた組合せ問題。地図と地域的特色の文章とを組合せ空間認識を問う。「あ」では完新世の照葉樹林の分布との関連を扱い、原始以外で扱われることの少ないであろう自然環境的要因にも視野を向けさせる出題であった。

問3は『続日本紀』の読み下し文を活用した図版・説明文を用いた組合せ問題。初見資料で受験者の興味関心を喚起する出題であった。「あ・い」からの2択で資料活用の技能、「う・え」からの2択で知識を問うことで、資料活用の技能と知識、分析的思考を要求する構成で工夫された問題であった。

問4は漆紙文書と戸籍の特徴や性格を問う正文の組合せ問題。図2に示された漆紙文書の戸籍から読み取れる情報と「ノート」の記述内容、及び古代律令税制に関する基本的知識の統合を要求する日本史探究の理念を反映した出題であった。

問5は律令国家の漆の使用について、高校生が作成したノート記述内の誤文を選択する年代誤りの問題。文章下線部から8世紀の事柄として当てはまらないものを選択する。古代・中世の文化・社会経済に関する知識が問われた。

第4問は藤原定家を中心に、中世の政治・文化を扱う。系図や日記史料を活用した設問は、史料の性格を理解しながら歴史事象を考察する能力を問うものであった。また、年代配列問題において歴史用語を直接提示せず、内容理解に基づいて判断させる形式は、共通テストの出題方針を象徴するものである。

問1は中世の家職に関する会話文の空所補充。藤原「北家」、「軍事貴族」といった平安時代政治史の用語について理解を問う問題であった。ただし「軍事貴族」という語については掲載されている教科書が少数にとどまることもあり、出題にあたっては説明を要するであろう。

問2は藤原定家の系図及び『明月記』の現代語訳を用いた図版・説明文を用いた組合せ問題。系図・資料及び知識を組み合わせる問題であったが、正文の②のみは純粋な資料読み取りで判断できるため、選択肢文の間で文章の構成要素にやや偏りが見られた。

問3は生徒作成という設定の「ノート」に関連させた正誤組合せ問題。「あ」は鎌倉文化史に関する知識問題であったが、「い」はノートからの読み取りのみで判断でき、その根拠となる部分の判断も平易である。歴史資料を活用する力が問われたとも言えず、どのような力を問おうとしたのか設問意図が不明瞭である。

問4は中世政治の年代配列問題。Ⅰは半済令、Ⅱは観応の擾乱、Ⅲは中先代の乱のことであるが、そうした歴史用語を避けて、いわゆる「開いた文章」を用いる点は共通テストらしい。語句の単純暗記に終始する学習を回避したい高校現場としては歓迎したい出題である。

問5は冷泉為和の滞在地を示す地図から中世における各地域的特色として適切なものを選ぶ正文組合せ問題。「あ・い」は中世政治・社会経済の知識と地図上の空間認識を問う。「う・え」は実質的に文化史の知識を問う問題であった。

第5問は江戸時代の社会と海外の情報との接触を主題にした出題で、グラフやノートを用いて海外情報の受容を扱う出題であった。

問1は江戸時代の対外関係史に関する基本的な理解を問う正文選択。

問2は新井白石の事績に関連して『采覧異言』・『訂正増訳采覧異言』の国別記述量比較のグラフ

を活用した組合せ問題。記述量の変化とその背景の分析に知識を応用する問題で，資料分析能力の測定を意図したものであると考えられるが，資料活用の必然性という点で改善の余地が認められる。

問3は江戸政治史の理解を問う誤文選択問題。①足高制，②相対済し令，③目安箱の設置，④天保の改革の内容であるが，用語の提示を避け，内容を示した文章で内容理解を測るよう工夫されている。

問4は江戸時代末の対外関係史に関する基本知識と「ノート」にまとめられた歴史事項の読み取りと考察を組み合わせる問題。下線部をアヘン戦争と判断できれば「あ・い」の選択は適切に判断できたであろう。

問5は幕末の対外関係史について，疑問とその調査方法の組合せを選択する探究場面を想定した出題。Wを誤文と判断するためには田中勝介の渡航先についての知識が必要となる。他の小問に比べてやや詳しい事項の理解を問うものであったが，歴史の探究をする際の手続きを問う，科目の趣旨を反映した出題であった。

第6問は障がい者や病者を近現代の社会的弱者として位置づけ，その権利獲得や待遇改善の運動に焦点を当てた出題であった。例年，第6問は近現代からの出題であるが，問1では古代から近世を扱うなどテーマ史としての性格が強く打ち出された構成であった。

問1は光明皇后，忍性，徳川綱吉の事績の整理表をもとに時代横断的に，具体的な歴史事象3件について，共通点や他の具体事例との関係を問う正誤の組合せ問題。選択肢「あ」が表からの分析的な文章であるのに対して，「い」「う」は知識を問う内容で問題の意図が不明瞭であった。また，正文「あ」は「古代と近世の事例は，ともに仏教に帰依した人物によるもの」としているが，中世の事例として表中に提示されている忍性もまた「仏教に帰依した人物」に当てはまるはずである。

「あ」は正文として成立しているが，慎重に文章を吟味した受験者は中世が除外されていることに戸惑う可能性がある不用意な表現である。本問については分析的な選択肢二つと知識を問う選択肢二つを組み合わせるか，全て分析としての妥当性を問う選択肢とすることで，出題意図が明確な良問となったであろう。

問2は障がい者教育に関して述べた新聞広告について，内容・背景を問う図版・説明文を用いた組合せ問題。「あ」は資料の読み取りと近代初期の西洋思想の理解を，「い」は八幡製鉄所の設立年代と資料の年代との関係を問う。背景となる西洋思想の性格に着目させる「あ」は読み取りと知識の両面を要求する出題である。

問3は1930年代～50年代の社会的弱者とその活動に関する整理表に関する語句補充問題。戦前，戦後を貫く小問構成は昨年どおり。終戦直後に流行した疾患として「結核」の理解を問うが，疾病名は教科書の記述で必ずしも強調されているわけではない。「イ」をポツダム宣言と判断することは平易であったらう。

問4は東京オリンピック・パラリンピックに関する資料から，時代背景と「推測」を問う正文の組合せ問題。「あ・い」は実質的に東京オリンピック前後の事柄に関する知識問題であったが，「X・Y」は資料の「意図」の分析に踏み込むものであった。日本史探究の授業の方向性を示唆する良問である。問5は大問全体を通じた総括的な問い。「それぞれ」に当てはまらないもの，として各資料，ノートの性格を問う正誤問題(誤文)。資料の読み取りや解釈など授業場面に即した出題であった。

3 総評・まとめ

今年度は，現行の学習指導要領に基づく共通テスト『歴史総合，日本史探究』として2年目の実施となり，通算で4回目の実施となったのが今回の追・再試験問題である。

従来強調されてきた生徒の学習場面を意識した出題構成や資料重視の姿勢が，より明確に示された。

全体を通して、生徒のメモやグラフ、地図など多様な資料を活用し、思考・判断を求める問題が中心の構成は、試行調査問題や昨年度の問題と共通しており、資料分析や概念理解を重視していることが確認された。

文章選択問題においても、歴史用語を直接用いるのではなく、歴史事象の内容理解に基づいて判断させる工夫が行われていた。また、第6問の問4のように、歴史事項の理解にとどまらず、資料の意図や評価を問う設問も見られ、日本史探究の授業の方向性を示唆する出題であった。このように探究学習の過程を反映した出題や時代横断的な思考を求める設問、資料の意図や評価を問う問題などは、現行の学習指導要領の理念を具体化したものである。受験を意識することで、高校生の学習は暗記中心になりがちであるが、本問のような出題は歴史的思考力の育成を重視する観点から評価できる。

高校での探究的な歴史学習の方向性を示す作問が定着する一方で、一部には資料を活用しなくても解答可能な問題や、歴史的思考を十分に必要としない問題、歴史的文脈との関連が弱い概念問題など評価の対象となる能力が必ずしも明確でない設問も存在した。また、現代語訳や原文に近い資料のそれぞれの扱い方についても、さらなる検討の余地があるだろう。歴史学習は大学入試に従属するものではないが、共通テストの出題は受験者の学習や授業に大きな影響を与える。各設問において、どのような知識、理解、思考力を測定しているのかがより明確に示される出題を期待する。